

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成26年6月5日現在

機関番号：34310
 研究種目：基盤研究（B）
 研究期間：2011～2013
 課題番号：23330187
 研究課題名（和文） 多文化社会の社会的リスクに対応するソーシャルワーク理論と実践論に関する研究
 研究課題名（英文） The Research for Social Risk problems and Social Work Theories and Practices in the Multicultural Society
 研究代表者
 黒木 保博（KUROKI, Yasuhiro）
 同志社大学・社会学部・教授
 研究者番号：20121593
 交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）13,400,000円、（間接経費）4,020,000円

研究成果の概要（和文）：多文化共生社会となった東アジア地域（中国、韓国、台湾、日本）の社会的リスク問題として、国際結婚移民女性と人権問題、子育て・里親・児童虐待、介護問題、移住労働者問題等を取り上げた。この問題解決・改善に対応/支援する社会福祉専門職者養成教育の視点からの研究に取り組んだ。研究成果としては、台湾、韓国での質問紙調査研究により、育児期の結婚移民女性家族生活の実態が明らかになった。またこれらの問題に対応する多文化家族センター等における支援実態も明らかになった。

研究成果の概要（英文）：Over three year period, we researched four subjects; 1)Married Migrant Women and Human Rights Problems, 2)Child Care and Abuse Problems, 3)Elderly Care Problems, and 4)Migrant worker, 5)Problems of Social Work Education and training within the Multicultural Society in the East Asia Region, China, Korea, Taiwan, Japan. We obtained the following research results regarding; 1) the parenting stress and mental-health problems of foreign brides during child care, 2) the clarification of the real situation of the Support Center of the Multicultural Society 3) family member that feel especially burdened and depressed by caregiving for child. We arrived at a tentative conclusion to formulate an effective theories and skills of the practice method for social work in this region.

研究分野：社会福祉学

科研費の分科・細目：社会学・社会福祉学（3802）

キーワード：東アジア・モデル構築、社会的リスク、社会福祉専門職

1. 研究開始当初の背景

これまでの科研費研究の継続性を踏まえて、東アジア地域をコアとしながら、新たに東南アジア地域との関連性を付け加えた。これらの地域で発現している多文化社会における社会的リスク問題にソーシャルワーカーがどのように問題解決・改善をめざして取り組んでいるか、その有効なる支援のための理論や技術を明らかにするという背景から研究を開始した。特に、結婚移民女性家族をはじめその家族の多くは社会的偏見や差別、社会的排除、言葉や考え方の違いによる葛藤、ストレスなどの生活問題に直面しており、また加えて育児期の結婚

移民女性家族においては、育児問題も大きな課題となっている。

2. 研究の目的

- (1)台湾・韓国、日本での国際結婚家族（父親・母親）の生活と育児に関する実態を質問紙調査にて明らかにする。
- (2)外国人移住労働者の生活実態とそれらの人々への支援サービス団体の現状の理解（タイ、ミャンマー、フィリピン）
- (3)子育て・養子縁組・里親・被虐待児支援に関する現状と課題の研究と共に、多文化共生支援センターでの援助プログラム内容と今後の取り組み方法を明らかにする。
- (4)これらの調査や実態解明により、社会福祉

専門者が活用する理論、技術の構築をめざす。
(調査訪問国: フィリピン、ベトナム、タイ、
ミャンマー、韓国、台湾、日本、ハワイ)

3. 研究の方法

(1) テーマごとに調査グループに分け、質的・量的調査研究方法を用いた

(2) 韓国・台湾・日本での研究協力者による研究体制、またタイ・チェンマイでの支援 NGO 団体の協力を得ての訪問・質問調査方法を用いた

(3) 実態理解のために、国際会議参加、国際セミナー開催をした

4. 研究成果

(1) 2010 年度は台湾の外国人母親の調査を行ったが、引き続き 2011 年度は台湾人の父親、韓国の外国人母親の調査を実施した。さら 2012 年度においては、韓国における多文化家族の父親に対する質問紙調査を実施した。また日本のデータとしては、多文化家族の母親に対する調査を実施した。この調査では、特に親の生活問題と不適切な育児行動との関連性について研究した。2013 年度においてはこれらの一連の調査内容をもう一度精査した。

(2) たとえば、2010 年度の台湾の外国人母親調査では、国籍では、中華人民共和国 (38.3%)、ベトナム (28.6%)、インドネシア (15.6%) であること、母親の 6 割以上が、商業的仲介業者の紹介による結婚であったこと、また日常的に経験する生活問題ストレスとしては、「夫の言動 (ふるまい) が理解できず不愉快になる」(34.3%) が最も高い項目であり、生活ストレス領域における結果でも「夫に対する否定的感情」が高くなっていることがわかった。また育児に関連したストレスの回答からは「かなりイライラする」「とてもイライラする」の最も高い項目としては「子どもが散らかした玩具や食べ物の後片付けに追われる」(20.2%)、次には「大人同士の会話などの邪魔をする」(18.1%) があげられる。不適切な育児行動に関する回答では、「子どもにあたってしまう」(32.4%) が最も多く、次に「お尻をたたく」であった。

(3) 2011 年の台湾の父親の調査結果では、核家族が 6 割以上を占めていること、最終学歴では父親は高校卒業、妻は中学校卒業が最も多いこと、父親の職業では「生産業」が最も多く、妻は専業主婦がもっとも多いこと、父親の 1 ヶ月の収入は 8 割以上が 3 万～6 万 NT\$ 未満であること、子どもの数は 2 人が最も多いことがわかった。具体的調査結果の日常的に経験する生活問題では、「妻は過ぎたことをいつまでも蒸し返すので、怒鳴りたく

なる」(20.6%)、「借金やローンがいつ返済できるかが心配になる」(19.9%)、「父や母が妻を信用しないので辛い」(19.3%) などの結果が得られた。不適切な育児行動に関する回答傾向では、「おしりをたたく」(67.8%)、「手をたたく」(49.4%)、「傷つくようなことを言う」(47.7%) などの順になっている。

(4) 2011 年の韓国の外国人母親の調査結果では、国籍ではベトナム (41%)、中華人民共和国 (29.1%)、フィリピン (22.2%) の順になっている。生活関連ストレスの回答傾向では、カテゴリ「かなりそう感じる」と「とてもそう感じる」が最も高い項目としては、「緊急の助けが必要な時に相談できる人がいないので悲しくなる」「韓国社会はダブル意に対する差別や偏見があるので不愉快になる」が最も多く、(30.1%) を占めている。次いで「家族 (自分の親や兄弟)」に仕送りができず心苦しい」が (29.1%) となっている。育児に関連したストレスの回答傾向では、「かなりイライラする」「とてもイライラする」が最も高い項目としては「子どもの要求を満たすために、自分の計画を変更しなければならない」(8.5%) であった。次いで「うるさくせがんだり、泣き言をいったり、文句を言う」(8.3%) であった。不適切な育児行動に関する回答傾向としては、「いつもある」「しばしばある」では「お尻をたたく」(35.9%)、「手をたたく」(29.1%)、「大声でしかる」(26.5%) となっている。

(5) 2012 年度の韓国の父親調査では、対象者の平均年齢は 44.1 歳、妻の年齢は平均 28.7 歳であった。世帯構成としては核家族が 5 割を占め、最終学歴としては父、母も高校卒業が最も多かった。父親は農林畜産業が最も多く、妻は専業主婦が最も多い。父親の月収平均は 5 割以上が 100 万～200 万ウォンであった。結婚に至った経路としては、「商業的な仲介業者の紹介」が 62.9%、次いで、「韓国で国際結婚している友人の紹介による結婚」が 10% となっている。結婚継続期間は平均 5.2 年である。妻の韓国語の習得状況は「理解能力」「会話能力」は 4 割以上が気楽にできるとの回答であった。多文化家族夫の生活関連ストレスでは「1 日でも早く今のような貧乏な生活から抜け出したいとイライラする」(24.9%) が「かなりそう感じる」「とてもそう感じる」の最も高い項目であった。育児では「かなりイライラする」「とてもイライラする」で最も高い項目だったのは「子どもの要求を満たすために、自分の計画を変更しなければならない」(17.9%) であった。パーソナリティ特性に関する回答傾向での攻撃性では「かなりあてはます」「あてはまる」で高い項目となったのは「いらいらして

いると、すぐ顔に出る」(59.8%)、次いで「かっとなることを抑えるのが難しいときがある」(52%)であった。また社会的スキル(思いやり)に関する回答傾向では、「誰にでも温かい気持ちで接する」(80.7%)が「かなりあてはまる」「あてはまる」で最も高い項目となっている。またコミュニケーション・スキルでは、「人間関係を良好な状態に維持するように心がける」(81.6%)が回答カテゴリ「やや得意」「得意」で最も高い項目となっている。不適切な育児行動では「大声で叱る」(41.9%)「お尻をたたく」(33.6%)が高い項目になっている。

(6) 日本の外国人母親の調査結果では、外国人母親の平均年齢は39.6歳、夫は45.5歳が平均年齢であった。核家族が8割、最終学歴は外国人母親とその夫と両方とも大学(4年制)卒業が最も多く、47.8%であった。職業では母親は専業主婦、夫は会社員が最も多い。外国人母親の約3割が収入なしであり、夫の月収平均額の約4割は「50万円以上」であった。外国人母親の国籍としては、中華人民共和国(62.3%)、タイ(33.3%)、フィリピンの順となっている。結婚継続期間は平均10.9年となっている。結婚に至った経路としては、外国人母親の約6割以上が「外国人労働者として日本に滞在し、日常生活での恋愛で結婚」であった。

生活関連ストレスの回答傾向では、「かなりそう感じる」「とてもそう感じる」が最も高い項目は「夫の言動(ふるまい)が理解できず不愉快になる」(18.8%)であった。次いで「夫は親身に悩みを聞いてくれないので悲しい」「緊急の助けが必要な時に、相談できる人がいないので悲しくなる」がそれぞれ15.9%であった。育児に関連したストレスの回答傾向では、「子どもの散らかした玩具や食べ物の後片付けに追われる」(18.8%)が最も高く、次に「子どもの要求を満たすために、余計な仕事が増える」が13.3%であった。

パーソナリティ特性に関する回答傾向では、攻撃性に関する回答で「自分の権利は遠慮しないで主張する」が最も高く、35.3%を占めている。次いで「友達の意見に賛成できないときには、はっきり言う」が27.9%であった。社会的スキル(思いやり)に関しては、「誰にでも「ありがとう」や「ごめんなさい」が素直にいえる」が最も高く80.0%、次いで「誰に対しても優しく接する」と「誰にでも温かい気持ちで接する」がそれぞれ76%であった。コミュニケーション・スキルに関しては、「人間関係を良好な状態に維持するように心がける」が最も高く、92.3%を占めていた。不適切な育児行動に関する回答傾向としては、「いつもある」「しばしばある」「時々ある」の3つの回答カテゴリに着目すると、

「大声で叱る」(31.9%)、「お尻をたたく」(31.9%)となっている。

(7) 以上のような調査から、上記以外にも次のようなまとめが可能である。

①生活ストレスにおいては、韓国人父親は、経済的問題について強くストレスを感じる傾向があり、日本の外国人母親の場合には、夫の言動(ふるまい)が理解できず不愉快になることや親身に悩みを聞いてくれないので寂しいことにストレスを強く感じる傾向があった。

②社会的スキル(思いやり)について、韓国人父親では「誰に対しても面子を傷つけない」と「誰にでも温かい気持ちで接する」といったスキルを8割以上がもっており、日本の外国人母親では8割以上が「誰にでも「ありがとう、ごめんなさい」が素直にいえる」といったスキルを持っていた。

③コミュニケーション・スキルについて、韓国人父親では、人間関係を良好な状態に維持するように心がけるスキルを持っている場合が最も高く、日本の外国人母親でも人間関係を良好な状態に維持するように心がけるスキルを持っている割合が最も高かった。

④親の生活問題と不適切な育児行動の関連性を検討した結果、韓国の父親では、育児関連ストレスが強いほど子どもに対する不適切な育児行動を行う頻度が高い傾向がある。台湾人父親でも同様に育児関連ストレスが強いほど、子どもに対する不適切な育児行動を行う頻度が高い傾向となっている。日本の外国人母親では、生活関連ストレスが強いほど、子どもに対する心理的虐待を行う頻度が高い傾向になった。この結果は韓国の外国人母親も同様であった。しかし、台湾の外国人母親では、育児関連ストレスが高いほど、子どもに対する不適切な育児行動を行う頻度が高い傾向となっていた。

このように、多文化家族の不適切な育児行動の発生には、韓国の父親、台湾の父親と外国人母親では育児関連ストレスが関係していること、韓国と日本の外国人母親では生活関連ストレスが関係していることから、今後は、国や文化・生活習慣を勘案した多文化家族に対する育児支援のあり方が検討されなければならないと推察される。

(8) 次に、子育て・養子縁組・里親・被虐待児支援に関する現状と課題の研究と共に、多文化共生支援センター等による面接訪問の結果である。親と一緒に暮らせなくなった

子どもに対する日韓のフォスターケア政策の現状と課題について取り組んだ。親族または親族以外の人のフォスターケア認定のための研修については、時間延長とともにプログラム内容の充実化、認定後のフォローアップ研究の必要性が指摘できる。また担い手、実親に対するソーシャルワーカーなど専門職者からのワンストップ支援体制の設備では、専門職不足が深刻であることから、さらなる支援体制の充実化が課題となっていることが判明した。

(9) 養子縁組については、いまだに韓国では海外養子縁組数が多く、裁判所による養子縁組の許可制度は始まったばかりである。ハーグ条約加盟のために韓国では養子縁組政策の転換をはかっている最中である。また未婚の母親と子どもへの社会的差別が強いことから、安心して暮らすことは容易ではない現状がある。韓国では民間団体による養子斡旋がまだ活発に取り組んでいるという現状もある。このようなことも理解しながら、今後の日本の養子縁組政策のあり方検討が必要と思われる。

(10) なおタイ・チェンマイ、ミャンマー・ビルマ調査訪問の研究成果については、タイで働くミャンマー人移住労働者の問題、生活支援に取り組んでいるNGO活動の現状と課題について論究した論文「移住労働者とNGO活動からみるアジア共同体—タイにおけるMMNとMAP Foundationの支援から—」を昨年12月に書名『高齢社会をめぐる諸課題とアジア共同体』編著者に提出済みである。

2012年では約300万人の外国人労働者を受け入れているタイにおける労働力不足、最低賃金問題などに言及し、NGOが発行した外国人移住労働者の生活実態手記内容を手掛かりに現状理解を進めた。タイにおける外国人労働者政策の変遷から、労働者が直面している諸問題解決の支援に取り組んでいるMMN、とりわけミャンマーからの移住労働者への支援を続けているMAPの取り組みについてまとめている。

以上の調査結果また訪問調査結果から、これらの支援に取り組むソーシャルワーカーの活動から今後の理論や技術開発に取り組んでいきたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計4件)

- ① 黒木保博「大学におけるボランティアセンターの現状と課題」『社会福祉研究』、査読なし、第112号、2011、56-64

- ② Rie Kondo, Vers un renouveau de la politique japonaise, Informations sociales, 査読有、No.168,2011,52-60

- ③ 尹靖水・百瀬英樹・黒木保博・中嶋和夫「台湾多文化家族の日常生活に関連したストレス問題」『評論・社会科学』、査読有、97号、2012、1-18

- ④ 尹靖水・朴志先・金貞淑・黒木保博・中嶋和夫「韓国における多文化家族の親の生活問題と児に対する不適切な育児行動の関連性」『評論・社会科学』、査読有、107号、2014、1-19

[学会発表] (計3件)

- ① 朴志先・尹靖水・黒木保博・中嶋和夫「多文化家族の親の生活課題と不適切な育児行動の関連性」、韓国社会福祉学会秋季学術大会、2012・11・09-10、於；大韓民国・国立ソウル大学

- ② Yasuhiro KUROKI、Social Welfare Responses to the Issues and Challenges of Social Care; A Comparative Perspective in Japan, Koreana Academy of Social Welfare, (招待講演)、2013・11・01-11・02、Osong, Korea、

- ③ 尹靖水・朴志先・金貞淑・黒木保博・中嶋和夫、「多文化家族の親の生活問題と児に対する不適切な育児行動の関連性」、韓国社会福祉学、2013・11・01-11・02、Osong, Korea、

[図書] (計0件)

[産業財産権]

○出願状況 (計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況 (計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

[その他]
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

黒木 保博 (KUROKI, Yasuhiro)
同志社大学・社会学部・教授
研究者番号：20121593

(2) 研究分担者

中嶋 和夫 (NKAKAJIMA, Kazuo)
(2011, 2012)
岡山県立大学・保健福祉学部・教授
研究者番号：30265102

尹 靖水 (YOUN, Jyonsoug) 2011 のみ
梅花女子大学・現代人間学部・教授
研究者番号：20388599

桐野 匡史 (KIRINO, Masashi) 2011 のみ
岡山県立大学・保健福祉学部・助教
研究者番号：40453203

(3) 連携研究者

近藤 理恵 (KONDO, Rie)
岡山県立大学・保健福祉学部・准教授
研究者番号：60310885